

OB 情報

<岐阜高校剣道部 OB の情報をお知らせします。>

昭和33年卒 大前好弘先輩

(昭和32年第12回静岡国体高校の部で全国優勝された記事が昭和51年発行の「岐剣連広報」に掲載されました。先鋒 大前先輩(岐高) 次鋒 片岡 守選手(岐農林高) 大将 村井 幹選手(岐工高) 資料提供 村瀬隆平先生)



想 い 出

昭和三十三年十月三十日

静岡国体初優勝

選手一同記念写真



昭和三十一年第四回全日本剣道選手権、浅川教士優勝に引き続き、昭和三十三年静岡国体にて優勝の栄冠は我が高校剣道に輝き天下をアツと云わせた。思い出は二十年二昔前となりました。

先鋒大前好弘君は岐高卒業後、鮮魚商を立派に受けつぎ二男児の父、片岡守君は岐農高より明治大学と進み、明治の主将を務め、文武不岐を体し日米ブラインダーの若き課長、又三児のよき父、大将の村井幹君は岐工高卒業と同時に印刷業の父を扶け、剣道の修業も続いて雙柳館で浅川先生の指導を受け剣道界に活躍中、など此の栄冠も原点を等しくかえり現在をたしかめますと此の三選手の優勝のかけには県剣連理事長、範士八段浅川春男先生の三十二歳からの六年間の激しい稽古をうけてこれに耐えた人知れずの年月があったと聞いております。稽古の鬼とまで云われました浅川春男先生の猛稽古を

つけられて修練したこの三選手は、東海の勇者を誇る中京高校（愛知）を破り、戦後初めての東海代表と決定するや岐阜勢強し々の脚光を浴びることとなり、「堅陣を誇る高校剣道」「勝負強さは日本一」「旋風剣士の気概」と昭和三十三年十月二十一日の

新聞各報道関係は「国体秋季大会、県代表の力を探る」「優勝候補の最右翼、超高校級の三選手」と後に退けない見出しに発表され、これが又確報となって初優勝を獲得、剣道界をアツと驚歎させ、岐阜駅に降りたった感激の監督浅川先生を間に三選手の紅顔は歓迎に集まった五百名近くの人波に包まれ、国体高校剣道優勝万才と人生の一頁を飾りました。

剣道修業の「守」「破」「離」守は基本であり、破は応用、離は試合である。守は小僧で、破は番頭、離は独立して店を持つことである。小中学校義務教育が守なれば、破は高校・大学であり、離は一般職業人実務についている人である。

此の理念から現在の人は徹底した苦しい困難と戦い、打ち込まれた土台に基本「守」がある。その徹底した基本打込みからの破の応用を考える時「守」に対して甘さがあり、過保護でないだろうか、試合勝負に走り勝ちで、級位段位荣誉を求め過ぎはしないだろうか。最近六、七段の審査は厳しい、むつかしいの声を聞く時、考えてみますに、苦しい精進を積み上げた六年八カ月の長い稽古を想像し、此の広報によって、今後本連盟の皆様さん方に一の教訓になることを期待します。歴史に残る東西対抗剣道大会も大成功に終り、本年度は底辺の拡大を計るべく事業予算も計画され、会長の挨拶にも剣道の理念の具現、即ち具体的な活動を希望されています。充実した本連盟の力を遺憾なく發揮することを祈念して思い出の記とします。

広報委員 中 島 学

昭和34年卒 高橋敬明先輩 より

貴重なアルバム写真やご活躍のご紹介





昭和34年岐阜創造部



昭和33年



中央 浅見先生 昭和31年~35年





赤川 寛昭 内谷 忠生 西田 寛見 後藤 謙用 大谷 礼徳 伏屋



平成7年10月28日 OB稽古会
総会(長夜川石金)





左端 杖原山寛吾先生



高橋敬明

(近畿実業団剣道連盟会長)

月刊剣道時代 八月号掲載

直心是道場

この言葉は経典「維摩経」の中の一句であります。

釈迦の弟子維摩居士と光厳童子の問答。ある日維摩居士が城外より帰って来るのを見た光厳童子が「いずこより来たるや」と聞く。居士は「道場より来たる」と答えました。日頃より静寂な道場を探していた童子は「その道場はいずこにあるや」と尋ねた所、居士は

「直心是道場、虚仮なき故に」と喝破したとあります。すなわち「直心」、真つすぐな自己のありのままの心で精進していれば天地到る所が道場であり修業の場であるとの教えであります。

私共剣道愛好家が少し狭義に理解するならば「剣道具をつけ板張り道場で稽古するだけが修業ではない、日常生活の中、暇を見つければ

ては素振りなどで身体を鍛え、また書籍などをひもとく先人の教えを学び、気力を養って人間形成に役立たせる事が肝要である」との教訓であります。

私も十数年前、実業団大会の試合中にアキレス腱を断裂し、稽古ができない時期がありました(幸いギプス固定のみで治療、三ヶ月で稽古再開)。また、四十歳代の何年間は仕事の関係で道場での稽古ができない期間もありました。

しかし、この言葉を座右の銘としてあがめベッドの上で素振りをしたり、また帰宅後、基本練習などを行ない、身体を鍛えた時もありました。

阪急百貨店野田孝元会長もこの一句を愛され、毎朝自宅で居合を抜かれ、身体を鍛え、気力を養ってからお出社しておられました。

容易に到達出来る奥義の世界が存在するならばそれは「道」ではないと云われます。

「修業の先に彼岸(理想の世界)があるのではない、修業するその中に彼岸は存在するのである(道元禪師)の言葉を噛みしめこの道を歩き続ける覚悟であります(写真の背景の色紙は、ある書家にこの話をした時、「真つすぐで正直な心はいつも円くあったらいいです」と云って書いてくれました)。



たかはし・よしあき／昭和15年岐阜県生まれ、71歳。岐阜高から中央大に進む。岐阜では三橋秀三先生、関谷好安先生、大学では北島辰二先生、須郷智先生に師事する。卒業後、阪急百貨店に入社、取締役、監査役等歴任後退職する。阪急時代は会長であった野田孝元氏の薫陶を受ける。元阪急百貨店剣道部長。現在、近畿実業団剣道連盟会長、大阪府社会人剣道連盟会長、全日本実業団剣道連盟副会長、(財)大阪府剣道連盟副会長、(財)大阪体育協会理事、剣道教士七段。

私の スブレエ 解消法

真剣の刃の上を渡るような緊張感が道場を包み込む。右籠手を元に戻し、相対する二人がゆっくりと青眼の構えで立ち上がる。突然、甲高く尾を引く気合が放たれた。左へわずかながら動きつつ、じりじりと間合いを詰める「めーん」。上段から竹刀がうなった。鐺もどで受け止め、跳ね上げる。その刹那、左手がぐいっと伸び、竹刀がのど元を突いた。「一本」。高橋さんの得意技「片手突き」が決まった瞬間だ。

「ある程度年齢がたつと奥にはまっていくんです。奥義は深い。まだまだ道の女関、入り口に立った感じです」。面を

外し、浮かび上がった汗をふきながらきびきびと話す高橋さんは剣道教士七段。六年前から阪急百貨店の剣道部長を務めている。仕事を終え、週に一、二度は道場「番舞会館」に足を運び稽古に汗をながす。「仕事に関係なく突っ込める道があるというのは、いいもんです」と話す表情は、どこまでも透明だ。

こんな逸話がある。

平成十年三月、東京・日本武道館で開催された全日本実業団・高壮年個人戦の五十五歳以上六・七段の部に出場。堂々三位となった。だが、準決勝戦でテレス腫を断裂。だが、ギプス固定だけで入院

阪急百貨店常勤監査役 高橋敬明さん(59)

学び、教える礼儀と規律



「剣道は気と気の戦いです」という高橋さん。稽古をつけるまなざしには、みじんの迷いもない

せず、十八日目で出勤、三カ月で練習を再開したという。不屈の闘志は周囲の人を驚かせた。

うらやましいことに、百貨店社員はその闘志に接する機会がある。大卒新入社員研修だ。「剣道を通じ、礼儀と規律の大切さ、そして基本がいかに大切かということを知ってもらいたい」。研修を機に剣道に魅せられ、剣道部に入室した社員も少なくないという。

昨年、取締役から監査役に立場が変わった。企業の粉飾決算が相次ぎ、「不明朗な時代となり、監査役業務、責任が

大きくなってきました。商法の解釈も単純ではない。日々、勉強ですよ」。思ったように竹刀を握れないのが悩んだが、そこは闘志あふれる高橋さん。座右の銘である「直心是道場」を忘れず、日常生活の中でも鍛錬を怠れない。

中学時代に剣道と出会い、はや四十五年が過ぎた。今年五月、年に一度、全国から六段以上の猛者が集まる「京都剣道演武大会」に出場。このとき、四十二年ぶりに高校時代のライバルと奇遇にも対戦した。「もう懐かしくてね。やる前から『よろしく』って」。剣をまみえた

出会いが廃ることは、決してないと悟った。

「八十歳が過ぎて若者と立ち会えるのが剣道の良さ。武道の良いところを生かし、実業界の後進に伝えるのも使命だと思います」。その大きな思いは、時を経てなお竹刀に宿り、脈々と、教える子たちに受け継がれていくに違いない。

文・竹堂 輝之
写真・山村 雅彦

十四年分

(たかはし・よしあき) 昭和38年中央大法卒、昭和40年中央大法学部卒業。昭和41年、阪急百貨店入社。四條河原町阪急・販売促進課長、同店長などを経て平成5年取締役、10年から常勤監査役。平成5年から阪急百貨店剣道部長。全日本実業団剣道連盟理事、大阪府剣道連盟常任理事。岐阜県出身。